

【感想】

- 菅原先生のたくさんの事例の中からきこえない子どもたちと接する上で大切にしたいことをたくさん教えていただきました。音声も手話も丁寧に使い、きこえない世界を想像しながら関わっていきたいと思います。そして、自分が多様な人々や多様な生き方を知ること、自分の経験してこなかった生き方を知り、そこから子どもたちにたくさんの選択肢があることを伝えていけたらと思います。
- 菅原先生のお仕事についてはよく存じ上げていますが、菅原先生が常日頃、お仕事に対して、どのようなお考えで取り組んでおられるのかが分かり、いろいろな点で改めて勉強になりました。有り難うございました。
- 難聴児が困ることについて、丁寧に事例を交えて教えていただき、大変参考になりました。やはり我が家が選択した進路は間違いないと思えました。
- 乳幼児期からの丁寧な子育て、言葉かけ、障がい認識の意識付け、軽中度難聴の支援のあり方など多くの事を学ぶ事ができました。私は小学部の重複の子ども達と関わっていますが、自分自身が様々なことに気付き、ていねいなやりとり、きちんとした日本語の指導に心がけねばならないと改めて感じました。
- 大変示唆に富んだ素晴らしいご講演だったと思います。一人でも多くの保護者、学校関係者に聞いていただきたい内容だと思いました。
- 事例をあげながらの手話の重要性をお話いただき、改めて手話を用いた教育、親子の支援の大切さを感じました。軽度・中等度の子供、家庭では、幼ければ簡単な言葉で会話が完了しているため、困り感がすぐ目の前に見えないこともあり、やはり手話を積極的にとりいれていないご家庭もあります。先生の事例も含め、軽度・中等度の子供を手話で育てた先輩保護者との出会いを作れるよう考えてみたいと思います。
- 菅原先生の講演で話された一言一言が、幼稚部教育、乳幼児教育相談を日々行っている中で感じていること、親に対して伝えたい内容そのものでした。聾学校や家庭は、社会の中で自立していくために、依存先を自分で開拓していける大人になるために、通じること、分かることの楽しさ、大切さ、必要性を、しっかり分かる環境の中で身に着ける場であると改めて感じました。本当にありがとうございました。
- とても勉強になりました。ありがとうございました。スライド資料がいただけるとありがたいです。

- 豊かな経験を踏まえた知恵を適格なことばで示してくださり、大変よく分かりました。次世代の教育の場で活かしていきたいと思います。ありがとうございました。
- 大変分かりやすく、ためになるものでした。
- 聴覚口話法からの長い間の経験をもとに、お話しいただき、とてもわかりやすく、参考になりました。本校の乳幼児相談にも活かしていきたいと思います。
- Zoom のサインインに手間取り、遅れて参加しました。最初が視聴出来ず残念でしたが、スガワラ先生の貴重なお話を聞いて良かったです。ろう学校に勤務していますが聞こえにくさ、わかりにくさについて、再認識です。保護者と、しっかり話し合おうとおもいます。今日はありがとうございました。
- 大変わかりやすくお話しして頂き勉強になりました。ありがとうございました。
- 遠い東京からの貴重なお話をしていただきありがとうございました。改めて早期からの親子の手話でのコミュニケーション、書記言語力の大切さ、障がいについて周囲に説明できる、支援を得られる力が必要だと感じました。自己肯定感を高められるよう日々の子育てに、工夫しながら楽しめるといいです。
- 時間があっという間に感じられるくらい、中身のとても濃い講演でした。本当に聴けて良かったです。私達親子は、0歳から幼稚部入学までずっと乳相に通っていたので、菅原先生のお話に近いことはずっと学んでいたつもりでした。しかし、人工内耳の息子は、静かな場面で少人数でゆっくり話せば音声だけで通じてしまうので、ついつい音声だけの会話が増えてしまいます。学んできたつもりなのに、です。「手話はハッピーになれる術」これから絶対に忘れないようにします。また、息子が聞こえにくいことや配慮を求めることを説明すること遠慮がありました。これからは「自立のために支援先を増やす」活動を、気負わずしたいと思いました。今日のお話、たくさんの保護者と学校の先生方にもぜひ聞いて欲しいと思いました。
- 以前菅原先生にお世話になっていました。改めて、聴覚児を育てるにあたり重要なことに気づかせてもらえました。ありがとうございました。
- 多くの事例を挙げながら、手話の大切さや養育の具体的なポイントを教えていただき、とても勉強になりました。今日教えていただいたことを、2学期からの教育活動に生かしていきたいと思います。
- 昨日に引き続き、お話を伺わせていただきました。日々、保護者の皆さんにどのように伝えれば良いのだろうか、自分自身の障がい認識についてもなかなか自分のことばで整理することが難しかったので、今回のお話は大変参考になり、また考えさせられる内容でした。

- 様々な事例について、具体的に話をしていただいたのでイメージしやすかったです。きこえているようできこえていない(きこえないこともある)人工内耳装用児や軽中等度難聴児の困りごとを、保護者さんが気づけるような支援が必要だなと改めて感じました。個々のきこえや置かれている環境は千差万別ですが、本人や家族が「きこえないんだよね」ってあつけらかんと言えるような支援、そう思える環境(社会)を作っていけたらと思っています。本当にありがとうございました。

- 保護者支援や障害認識の大切さを改めて感じることができました。これからの子どもとの関わりの中で今日のお話を活かしていきたいと思います。

- 生まれてからろう学校に入るまで聴覚口話で育ててきました。通じないことが当たり前で、母としてはとてもつらい日々でした。ろう学校で手話に出会い、子どもたちと手話でスムーズにコミュニケーションが取れるようになった今、何気ないやり取りに幸せを感じています。健聴の親は、聞こえる世界を知らないの、やはり子どもが聞こえないことは「可哀想」と考えてしまいます。生まれた我が子が聞こえないと分かったときに、すぐにろうの世界を知ることが出来れば「可哀想」ではなく、聞こえない我が子としっかり向き合うことが出来ると思います。聞こえない・聞こえにくい子どもが生まれた時に、様々な情報や支援が受けられる乳相が、当たり前にある世の中になってほしいです。

- ろう教育の現場で長年聞こえない子ども、そしてその保護者に対して直接または間接的に支援をされてきた菅原先生のお話は本当に勉強になりました。ろう教育には様々な考え方が存在しますが、どれか一つが唯一解ではないと改めて考えさせられました。一人ひとりの子ども、そしてその家庭の在り方を総合的に支援できるよう、これからも支援の最適解を模索し続けたいと思います。貴重なお話をありがとうございました。

- 自分自身に誇りと自信もった大人に育てること。そのためにはどのようなことが必要であるのか、様々な事例から改めて学びました。ありがとうございました😊

- 具体的な事例をたくさん聞かせていただき大変勉強になりました。保護者の手話力がとても大切であることがわかりました。

- 夏休みに入り、手話や難聴について接する機会が全くなくなり、意識が薄れていた頃に聞けたお話だったので非常にありがたかったです。私がスマホで視聴していたせいか、ところどころ聞けなかったり、資料の添付が見れなかったりと不具合がありましたが、参加して良かったです。今回、情報がどこにあるかを知らない、受け取ろうと思わないということを初めて知ることができました。そこに情報があると知っておかなければそこから情報を得ようと思わないんですね。例が思い浮かびませんが、色んなところに情報があることはわかるので一つ一つ子どもに教えられたらと思います。

また、最後の2歳3歳の親子の会話を聞いた時焦りました。まだ私の親子関係では子どもはイエスノーしかほぼ会話してないことに気づき、こんなに会話できるのかと驚きました。豆腐も豆腐だねと写真と同じと見せることくらいしかしてなかったのも、白いつか柔らかいつかあえて言語化して手話や音声で表現することをしようと思いました。質問して会話をするのも意識しようと思いました。何回言われても忘れてるなあと自分の情けなさを実感しますが、少しずつ前進していることを信じて前向きに関わっていきたいと思いました。

- とても分かりやすく勉強になりました。ありがとうございました。当事者 事例は特に参考になります

- 最初、うまくつながらず途中から参加でしたが、人工内耳した子、片耳難聴の子の話がでてきて、うちの子も両耳人工内耳をしていますが、友達との三、四人での会話は話に入るのを遠慮し、ずっと聞くのに集中していると言っていたので、今日の講演で学校生活で友達と分り合い、笑い合ったり、話したいの思いを持っている事、与えられる情報が全てだと勘違いしてしまう事などの話しがでてきたので、私は親なのに子供の話をちゃんと聞いていたのか、親が思う以上に本人は学校で不便な思いを沢山しているかもしれないとショックでした。家では手話、指文字もたまに使いますが、家族が多く、言葉でのやりとりが多いため子供だけ聞き漏らしがあったり、思い込みがあったりするので、気をつけて接していけたらと思います。また、自分から情報を取りに行く力大事だと思いました。聴覚障害があるからマイナスじゃなく、聴覚障害があっても自分に自信を持っていけるよう、支えていきたいと思いました。貴重な講演ありがとうございました。

- 学校教育現場からの生の声を直接伝達していただいた思いです。多くの事例紹介と共に、考え方の歴史的流れと、それに随時対応されてこられた先生方のご苦労やご努力を垣間見た思いが致しました。教育方法、特に手話の使用については現在でも考え方は多様で、保護者の方々も迷うことが多いと思います。出生直後から成人に至るまでの今回のようなライフステージパノラマを呈示することが重要だと改めて痛感いたしました。長時間にわたるご講演、ありがとうございました。

- 最後に先生が話された、いずれ聴者の中で生活するのだから早くから慣れさせる・・・という考え、非常によく耳にする考え方です。私はその考えに反対なのですが、その話をされる方に自分が返す答えがうまくまとまらずにいました。でも、今回の先生のお話を伺って、考えが整理されて、自分の中での回答ができたと感じました。学校・家庭では100%わかる安心できる環境を、日常生活場面ではたくさんの聴者とふれあい、伝わり会うには少し工夫がいること、どうしたら伝わり合えるのか経験させて行きたいと思います。本日はありがとうございました。

- 先生の教員としての体験を振り返って、ろう教育の歴史を話されたので、手話を否定していたころの背景なども理解できました。
- 聴覚障害児の人数が子ども全体の人数に比して、とても少ないので、子ども自身も保護者も出逢わないこと、出逢わなければ学べないことがあるんだなと思いました。
- 保護者への支援がないと保護者自身が障害を肯定的にとらえられないというのは、他の障害児の場合と同じですね。特に大人になった障害者と早く出会えることは、とても大切です。
- 地域の学校に通う子が孤立する話は、とても気になりました。
- とても学びの多い講演会でした。ありがとうございました。
- たくさんの当事者の体験談を紹介していただき聴覚障害が理解されにくい障害である事、軽・中等度難聴や人工内耳装用者が苦悩している現実を知り胸が痛くなりました。
- 「きこえる」と「わかる」は違うという事、自分から情報を取る力や思考力、コミュニケーション力を育てる為に日常生活の中で丁寧に関わる事や豊かな語りかけがとても重要であることがわかりました。子供との日々の関わりをもっと大切にしたいと思います。
- 熊谷晋一郎先生の言葉がとても印象的でした。「自立は依存先を増やすこと。地域との関わり」という言葉を教えて頂き、学校だけでなく地域との関わりを増やし子供の世界を広げて行きたいと思いました。
- きこえにくい、きこえないお子さま、そして成人の聴覚障がい当事者の方々の声に耳を傾け、当事者にとってどうあるべきかを追求してこられた姿勢に感銘を受けました。おそらく、菅原先生が所属されている聴覚支援学校のスタッフのみな様が一体となって取り組んで来られた結果だと思います。また、長年取り組んでこられた聴覚口話法の反省を、謙虚に分析して反省し方向転換していく

途上では多くのご苦労もあったことと思います。きこえない・きこえにくい子どもたちにとって社会がどうあるべきか、周囲の人たちがどう変わるべきかについて再度考えさせられる機会となりました。（私はST養成校の学生の非常勤講師をしまして、ちょうど定期試験の記述式問題に聴覚障がい児教育における手話の導入・採用についての問題を出したところ“マイノリティーはメジャーな方に近づかないと困る“と言った趣旨の解答が数件あり、社会モデルとしての考え方をもう一度提示していかなければいけないなあと感じていた時のタイミングでご講義拝聴いたしました。）

●質問1. 教育の中に手話を導入・採用していく過程の中で、学校内の先生方 や保護者の方々からの反対意見などは無かったのでしょうか？ また、CI装用児には聴覚音声法を勧める医療機関や療育機関もあると思いますが、方針が相反する時はどのように対応されているのでしょうか？（東京は保護者様の選択肢も多いので、療育機関の選択の段階で分かれていく と解釈してよろしいでしょうか。）

質問1 お答え

聴覚口話法の教育の中に手話を導入、採用する過程の中では、教員の反発する思いはあったと思います。都立品川ろう学校時代には手話を導入といっても、自身が小さい子供たちが生活の中で使う手話の語彙を十分に獲得していたわけではなかったため、あくまでも補助的な手段での使用でした。また、その親子が来校する時に使うことを校長が承認し、同僚にも伝えていたことで、大きな抵抗はありませんでした。乳相や幼稚部の仲間の中では理解があったと思います。ただ、小学部以上の教員の中には抵抗感を抱いた方は多かったのではないかと推察します。保護者については、直接手話を使うことについて異議を伝えてくる人はいませんでした。その親御さんの方針を認めてくださっていたように思います。こうした渡りの時期も2、3年でしたが、徐々に他の親御さんたちも私が感じるように、手話を使う方が子供の注目がよくなり、伝え合いがしやすくなることを実感されていったように思います。幼稚部にその親子が入学した後に、学部全体で教員が手話を使うようになり、子供も使い始めていったと思います。保護者の方はわが子を目の当たりにしているせいも、手話が必要という考え方の変容が早かったように思います。

CI装用児に対しての療育、教育については、AV法（オーディトリバーバル）、聴覚口話法を勧める医療機関がほとんどです。医療機関からろう学校や難聴幼児通園施設に紹介されるため、医療機関とはケースに応じた支援だけでなく、教育方針についての十分な情報交換が必要です。これまでは、紹介乳幼児数の多い医療機関には年1回のケースカンファレンスをお願いし、医師とケースについての情報交換を通して、教育の考え方を伝えてきました。人工内耳装用児の中で良好に言語獲得につながるケースは定型発達、家庭での支援が良好という条件が必要になってきますが、実際には発達障害があったり、就労家庭で十分に聴覚活用の支援ができなかったり等、色々事情があって、人工内耳装用児の音声言語獲得の躓きが見られることもあります。こうした事情は医療機関では把握が難しいこともあるため、ろう学校が手話を使うから音声言語獲得が進まないのではなく、個々のお子さんや家庭の事情が色々あることも理解してほしい思いも含めて、現状をお伝えしながら、考え方のすり合わせをするようにしています。しかし、この2年間は医療機関からの紹介数が激減しています。その背景には手話を使うろう学校の教育方針への批判、軽・中度難聴児には手話

は不要、ろう学校の教育を受けるより、インテ志向といった考え方が影響しているのではないかと想像しています。医療機関には、様々な教育方法の選択肢があることを保護者に伝えてもらい、お子さんの難聴がわかったばかりの保護者には手話か音声かどちらかを早急を選ぶのではないことを伝えてきたいと思っています。東京の現状では、かかった医療機関で医師の価値観が添えられながら教育、療育機関が提示されるため、最初の決断、判断でその先の教育、療育の内容が決まっていくことになると思います。

●質問2.「手話も大事、日本語も大事」とおっしゃっていました。私もそう 思います。この問題が解消できれば、手話に反対する人は激減するのだろうと 思います。手話採用後、お子さまたちの日本語リテラシーのレベルはどのよう に変化したのでしょうか。(語彙力・構文力・読解力など良くなった点と、もし低下した側面があればそちらも含めて) また聴覚口話法の時期と比較して、教育プログラムの変更(改変)点についてご教示いただけると幸いです

質問2のお答え

手話は聴覚障がい者全てにとって、双方向コミュニケーションが成立する言語、同障の仲間と生涯安らいで語り合える言語、アイデンティティを確立することでよりよく生きるための言語という意味で必要だと言っても過言ではないと思います。ですから、手話の大切さは日本語獲得のための手段として考えるのではないということを強調したいと思います。そして、その大切な言語を親子で早期から獲得して育つことの意義は講演の中でお話した通りです。

手話を早期から親子で使いながら、日本語獲得を良好に育てるための教育は、新しい実践で、試行錯誤の連続でした。乳相の支援では、日本語の導入として、指文字を保護者にいつ頃から積極的に使ってもらおうと良いかといったことについては、検討を重ねました。その結果実践を始めた時期は2歳児後半、3歳頃からの導入だった指文字を、2歳を過ぎたら積極的に使うように保護者に支援するよう変えていきました。文字の導入については聴覚口話法の時代から変わってはいませんが、視覚的認知(細かい形の弁別)が育ってくる2歳半前後から環境に文字を入れる支援をしていきました。個々の子供によって、音声、文字や指文字と、優位に獲得する日本語は様々ですが、乳幼児相談の時期からしっかりと日本語モードを子供が獲得できるよう保護者に支援するようにしていきました。それをベースに、幼稚園以降、日本語のスキルアップを学校と家庭の両輪で取り組んでいった結果、添付の資料にあるように手話を早期から入れた子供たちの日本語、学力は確実に向上したと思います。

(添付の資料は元大塚ろう学校教諭、元学芸大学講師、木島照夫先生がまとめたものです。)

聴覚口話法時代と比較しての教育プログラムの変更については、乳幼児期から始まる手話の導入、指文字へのチェイニングが入ったことが大きく違うところです。聴覚口話法時代は音声言語による発話と文字で日本語獲得を促していましたが、音声言語を主に使う子供

たちにとっては指文字が加わった点が新たな部分かと思います。手話をベースに育つ重度難聴児の音声言語獲得は幼稚部から獲得する子供もいれば、小学部、中学部以降という子供もいます。個々の認知特性が様々であるように、個々の子供が獲得しやすい日本語も様々であるため、個々に応じた支援が必要なことは言うまでもありません。

音声言語獲得が厳しい子供たちで日本語力が高い子供たちは指文字での音韻獲得と読書等を通しての書記言語獲得が功を奏しているように思います。また、添付にあるように都立大塚ろう学校で取り組んだ小学部での日本語文法指導は確実な成果を生みました。木島照夫先生の論文がデータに基づいた情報提供をしていますので、是非お読みください。